

# 日本人学校と補習教室との教育交流

## コウノトリプランに基づいて

森 本 孝

(兵庫教育大学)

ポーランドでは、経済特区の関係から、日系企業の多くが首都ワルシャワから遠く離れた南西部の地方都市に進出している。そのため、ポーランドの邦人数は増加しているものの、地方で急増する分散型増加傾向が進み、ワルシャワ日本人学校では伸び悩む在籍数の確保が大きな課題となっていた。一方、日本人学校のない地方では、学齢児童の教育環境整備が急務となり、プロツワフでは保護者が自主的に運営する補習教室を立ち上げた。ワルシャワ日本人学校は、日本人学校についての情報発信を通して在籍数の確保に努めるとともに、大使館やポーランド日本人会等の協力の下、「コウノトリプラン」による日本語教育環境を必要とする地域への支援や、補習教室との教育交流を開始した。遠隔地との教育交流は、先人の苦労や努力を改めて想起する、いわば「教育の原点に学ぶ」取り組みでもあった。

キーワード：日本人学校、在籍数確保、補習教室、教育の原点

---

森本 孝：兵庫教育大学 / 学校教育研究センター・客員准教授

〒673-1421 兵庫県加東市山国2007-109 E-mail: tmorimo@hyogo-u.ac.jp

---

## An Interchange Education between Japanese School and a Supplementary Lesson Classroom Based on Konotori-Plan

Takashi Morimoto

(Hyogo University of Teacher Education)

At the Japanese school in Warsaw, it was a big problem what to do to increase students. The reason is because many of Japanese subsidiary companies were in the far-off southwestern offshore production area apart from capital Warsaw. In Poland, Japanese numbers increase, but it is a tendency to distributed increase to increase rapidly in a city except Warsaw. On the other hand, in the local city without the Japanese school, it became necessary to fix the education environment of the children who reached it in school age. Therefore the protectors of Wroclaw established a supplementary lesson classroom voluntarily. We contacted supplementary lessons classroom and tried for securing the number of enrolled students of the Japanese school. And, with cooperation of Japanese Embassy and the Japanese meeting, we promoted education interchange with the far-off place by "a Kounotori plan" and started support for the area that needed Japanese education environment. The education interchange with the distant place was an action to study essence of the education.

Keywords : Japanese school, Effort to increase child students, Supplementary lessons classroom, The origin of the education

---

Morimoto Takashi: Associate Professor honorary member, Hyogo University, 2007-109 Yamakuni, Kato-city, Hyogo 673-1421 Japan, E-mail: tmorimo@hyogo-u.ac.jp

---

# 1 ワルシャワ日本人学校の教育

## (1) 個が輝く学校づくり

ワルシャワ日本人学校は1978年の開校以来、大使館や日本人会の支援によって施設設備の充実が図られ、新校舎や体育館の借り上げなど、恵まれた環境が整えられてきた。図書室には約5,000冊の蔵書があり、日本人会会員であればだれでも自由に利用できる。

教員は、国内からの派遣が7名、現地採用講師が3名である。小規模校の特色を生かしてきめ細かな指導を行い、基礎・基本の徹底を図っている。また、一人一台のパソコン環境を活かした情報教育の充実、現地校との交流による国際理解教育、プレゼンテーション力やコミュニケーション力の育成に取り組んでいる。更に、大使館や日本人会との連携による各種交流活動を活発に行い、和太鼓演奏など「伝統文化教育」にも力を入れている。

ワルシャワ日本人学校は「健康・自立・共生・向上」を合い言葉に、「個が輝く学校づくり」をめざしている。



## (2) 学び合う異年齢集団

筆者が赴任していた2004年から2006年の児童生徒数は20数人であった。小人数ではあるが、児童生徒は一人ひとりが個性をよく発揮し、元気ではつらつとしていた。むしろ小人数であるがゆえに、活動の中心になる機会や表現の場に恵まれ、個々の自己有用感が育まれていた。

また、学校行事に限らず日常の委員会活動から休み時間の遊びに至るまで、異年齢の縦割り活動が自然に行われ、小学部低学年児童から中学部生徒までと一緒に活動し、共有する問題を解決しながら学校生活を送っていた。小学部の生徒にとっては上級生がよき目標となって向上心をかきたてられ、中学部生徒にとっては毎日の活動がリーダーシップを培うまたとない機会であった。それは、互いの違いを認め合いながら、協力してよりよい集団を形成していく営みでもあった。

学習場面でも、子どもたちはたいへん活発で、感想



や意見を積極的に発表する。平素から、お互いの考えや意見を尊重し、学び合うことを大切にしていた。学校日より「シレナ」には、子どもたちの生き生きとした様子が毎月報告され、次のような生徒の声からも、日本人学校の雰囲気が伝わってくる。

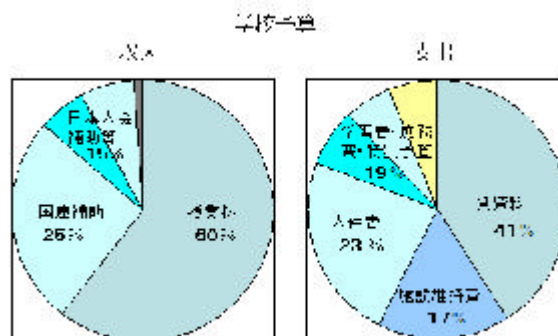
……日本人学校で生活してよく思うのが、全校生徒とも仲が良いということだ。小学1年生から中学3年生と一緒に活動するというのは、本当に“すごい”と思う。日本にいるとこんな経験はまず、しなかつただろう。小学校1年生と一緒に行動するのは簡単なことではないが、意外と楽しいものである。(中学部 男子)……

## (3) 学校運営上の課題

このように少人数ながら活気に溢れていたが、小規模校ゆえの課題も大きかった。学習の場面では、多様な考えや価値観にもまれることが少ないという、少人数故のデメリットも否定できなかった。学校としては、在籍数を増やし、さらに活力のある学校づくりをめざすことが求められていた。

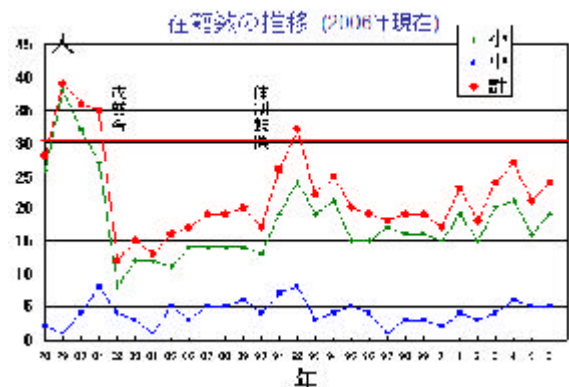
また、ワルシャワ日本人学校では、在籍数が思うように伸びず、毎年、窮屈な予算編成を余儀なくされていた。そのためにも、在籍数を30人程度にまで増やし、経営の安定化を図ることが課題となっていた。

予算の概略はおよそ次の通りである。



年間予算の総額は約2,000万円である。内訳は、授業料収入が全体の約60%、校舎借料補助として国庫補助が約25%、日本人会及び商工会からの補助が約15%である。支出の内訳は、校舎・体育館・グラウンドの借料が全体の約40%、電気・ガスや施設維持費が約17~18%である。合計57~58%、つまり授業料収入に相当する額がほぼ施設関係の支出分であった。また、支出全体の23%が現地採用職員の人件費であるが、これは国庫補助額にほぼ相当する。支出全体の約19%が、教育活動に必要な学習費と庶務費、教育環境整備等に必要の特別予算である。現在の授業料は月額1,470ズオティ（約50,000円）であり、もし予算全てを現在の授業料でまかなわなければならないとすれば、40名以上の在籍数が必要となる。

外務省指針では、日本人学校の存続基準は30名であり、それ以下で減少傾向が数年続けば閉鎖勧告の対象となる。ワルシャワ日本人学校も過去にその対象になったことがある。昭和53年に28名でスタートした本校であるが、これまでに在籍数が30名を超したのは4回のみで、ほとんどの年が20名前後で推移してきているのである。



## 2 ポーランドにおける邦人子女教育の課題

### (1) 分散型増加傾向

ポーランドでは、首都ワルシャワから200~300km以上離れた南西部の地方都市周辺に経済特区が設けられており、近年、日系企業の工場は地方の遠隔地に進出する傾向がある。(ポーランドの日系企業は、2004年段階では120社ほどであったが、2009年には230社を超えた。)



そのため、プロツワフ、ポズナニ、クラコフなど、ワルシャワ以外の地で邦人が増加する分散型増加傾向が年々顕著になり、地方都市では邦人子女の教育が大きな課題となってきた。そのような地方都市では、学齢児童生徒は現地校もしくはインターナショナル・スクール(以下、「インター校」と呼ぶ)に通うほかなく、場所によっては選択の余地なく現地校でポーランド語による教育を受けなければならない。地方都市の保護者や関係者からは、日本人学校に対して支援や教育相談を求める声が次第に聞かれるようになり、日本人会理事会や学校運営理事会でも、話題に上ることが多くなっていた。

### (2) プロツワフ地区教育状況調査

2004年の秋、地方都市の中でも近年最も邦人子女が増加しているプロツワフで保護者が自主的に日本語補習教室を開設したらしいという情報を得た。学校運営理事会と協議して、2005年1月に調査のために南西部の地

方都市プロツワフを訪問した。概要は以下の通りである。

- 調査日 2005年1月14日(金)  
 目的地 プロツワフ私設補習教室  
 所在地 プロツワフインターナショナルスクール  
 ul.Zielinskiego 38 PL 53-534 Wroclaw  
 目的 1.ワルシャワ日本人学校の紹介・PR  
 2.入学・転入・聴講の勧誘  
 3.補習授業へのアドバイス  
 4.現地教育状況調査  
 5.協力連携方法の模索

この訪問では、日本人学校PRのための資料(印)を持参するとともに、補習教室での指導に役立つと思われる資料(印)を補習教室に届けた。

- ワルシャワ日本人学校紹介リーフレット  
 日本人学校紹介プレゼンテーション  
 学校だより「シレナ」  
 短期聴講モデルプラン  
 入学説明会案内状  
 国語・算数指導資料(日本人学校作成)  
 補習授業ワンポイントアドバイス(文部科学省編)  
 国語・算数の補習授業指導計画(文部科学省編)

### (3) プロツワフ補習教室

訪問調査の結果、次のようなことがわかった。  
 補習教室開設の経緯

2000年頃から、プロツワフ近郊において日系の自動車関連工場の進出が進み、それに伴って邦人数が急増した。日系工場のあるパウブジフ地区は、プロツワフから南西に車で1~1.5時間ほど離れている。そのため、子どもと母親がプロツワフに住み、父親は工場近くの町に単身赴任しているという家庭もある。プロツワフに住む学齢期の子どもはほとんどは、英国系のインター校に通っている。2004年の秋、それまで各家庭で日本語の補習をしていた保護者が集まり、交替で先生役をしながら国語と算数の日本語補習をすることにした。この時点では某日系会社の事務所を借りていた。2005年現在、学齢期の邦人子女は19人であり、その内の約84%にあたる16人が補習教室を利用している。

#### プロツワフ地区の児童生徒数等 (2005年1月)

	世帯	邦人	幼児	児童	生徒
プロツワフ市内	10	37	3	12	2
パウブジフ地区	8	23		1	1
年内の増加予想	4	15		7	

#### 運営方法

日本人保護者による自主運営であり、保護者による運営組織(会長1,書記1,会計1,講師5)がある。保護者の中から5名が講師となり(内3名は教員免許保有者)、月曜・水曜・金曜の週3回、午後3時から45分間、国語を中心とする補充学習を実施している。会費月120

pln (約4,200円)の会員制である。小学部以下は学級担任制, 中学部は教科担任制をとる。先生役の保護者講師には指導者としての自覚をもってもらうために, 会費の中から謝金を払っている。場所は, インター校の特別カリキュラムとしての認定を受けることができたため, 放課後の教室を無償で借用している。

#### 補習時間割

15:00~15:45		月	水	金
就学前クラス		国・算	国・算	
低学年クラス			国・算	国・算
4年生クラス		国・算		国・算
中学生 クラス	奇数週	3年国	1年国	
	偶数週	3年数	1年数	



#### (4) 補習教室保護者との懇談 参加者11名

##### 日本人学校への入学・聴講について

午後の懇談会では, 最初に日本人学校の紹介とPRを兼ねたプレゼンテーションを行い, 一定期間ワルシャワに滞在して聴講する場合の費用を試算した『短期聴講モデルプラン』を提示した。保護者の反応は, 「日本人学校の子どもたちのいきいきした活動がよくわかった。近ければ入学させたいが, いったん根付いたプロツワフを今さら離れることは難しい。」とのことであった。

しかし, 日本人学校の短期聴講制度については全員が関心を示し, その場で日本人学校の見学を申し込む保護者もいた。

##### 保護者の願い

当初懸念していた「授業のために日本人学校から先生を派遣してもらえないか」という声は全くなく, 「学習指導は私たち保護者で出来るところからやっていく。日本人学校には適切な指導のあり方を助言してほしい」という。そこには, 保護者自身の手で子どもの教育を行うという力強い意志とエネルギーが感じられた。

さらに意外だったのは, 「学習成績もさることながら, 子どもたちの友だちづくりを大事なことと考えている。」という声だった。「交流や行事活動よりも学力向上のために教科の指導を優先すべき」という声は全くなかった。

そして, 補習教室が近い将来補習校として認められることになったとしても, 「何らかの形で日本人学校と太いパイプで結ばれていたい。」という。ここに今後の日本人学校補習教室の連携協力の鍵があると思われた。

懇談の結果明らかになった, 「保護者の願い」は次の

四つのキーワードに要約することができた。

- 「友達」…同世代の子どもの交流など日本語によるコミュニケーション機会を増やしたい。
- 「体験」…行事や学習活動の一部でも日本人学校の子どもと共にさせたい。
- 「情報」…授業内容やツール, 教え方についての情報がほしい。
- 「助言」…学期に一回でもいい, 日本人学校の先生と懇談をしたい。

### 3 遠隔地教育交流

#### (1) 現状分析

プロツワフ地区の調査結果に基づき, 学校運営理事会と日本人会理事会では, 他の地域に関する大使館の情報とも併せて状況分析を行い, 次のことを確認した。

日本人学校の在籍数は伸び悩んでいるが, ポーランドにおける邦人学齢児童は増加しつつある。

プロツワフ, ポズナニ, クラクフなどワルシャワから離れた地方で急増する分散型増加傾向が進んでいる。遠隔地では, 日本語での教育環境がなく, 保護者が子どもの教育に不安を抱いている。

プロツワフでは, 母親を中心とした日本語補習教室の自主運営が始まった。

プロツワフでは, 補習校の設立も模索しているが, いっぽうで日本人学校の協力・支援も求めている。

#### (2) 日本人会事業との連携

このような状況を踏まえ, 日本人会理事会では, 日本人学校の充実とともに, 地方の教育環境整備を最重要課題ととらえ, 具体的な方策を検討することになった。どのような協力あるいは支援ができるかについて自由

な発想でアイデアを出し合うため, 何回かのブレインストーミングを行い, 次のような意見や提案が出された。

##### 日本人学校への入学勧誘・聴講促進

ポーランド投資庁の協力を得て, 進出予定企業の情報を得る。

入学案内やPRリーフレットを電子化して, 既に進出している国内の企業や進出予定企業に配布する。ワルシャワ滞在中の生活に関する情報を整理して, 遠隔地の保護者等に案内する。

ホテルや車の手配, 未就学児に対するサポートなど, 滞在中の聴講生家族への支援を継続する。

##### 日本人学校と遠隔地の協力関係づくり

文部科学省の海外子女教育研究協力校の指定を申請

#### 遠隔地教育交流 (遠隔地教育交流)





して、遠隔地との教育交流を進める。

修学旅行での交流を企画する。一緒にバスチャーターすれば経費節減と安全確保も図れる。

教材の共同購入を企画する。コストベースを考えながら、できるところから実施する。今使っている指導書の廃棄を待つのでは時間がかかりすぎるので、新品を日本人学校で購入して、有償で提供する。日本人学校の図書で余っているものや廃棄されるものがあれば無償で提供する。日本人会としても提供者を募集する。

#### 日本人会及び商工会の支援

学校と日本人会が共催する運動会に、遠隔地からの参加チームを募集する。

日本人学校の短期聴講や学習発表会の前後に、日本人会行事を開催し、遠隔地からの参加を促進する。商工会を地方で開催し、併せて日本人学校から教員が出向いて教育相談を行う。

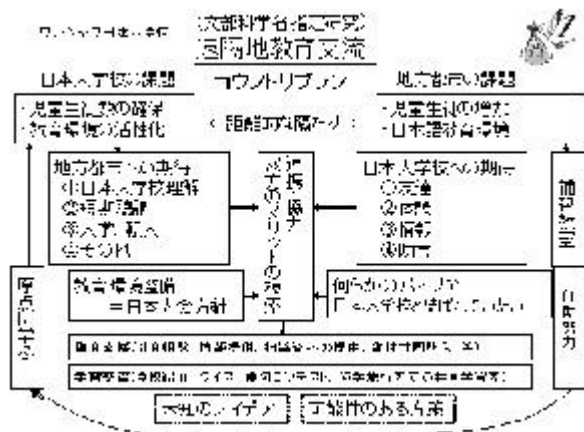
#### 広域日本人学校構想の夢

日本人会雇用による現地教員を地方に派遣する案について検討する。

制度的な制約はあるかもしれないが、ポーランド全体で一つの日本人学校とする構想についても可能性をさぐる。

### (3) コウノトリプラン

遠隔地における教育環境整備は、ポーランド日本人会としても放置できない課題であり、活動方針の最重要課題として位置づけられた。そして、日本人学校と遠隔地の地方都市との教育交流を進め、双方にとってメリットのある方策を模索することになった。日本人学校は、遠隔地との教育交流計画をまとめ、幸せを運ぶという願いを込めて「コウノトリプラン」と名付けた。



## 4 コウノトリプランによる実践

### (1) 教育支援

教育支援の内容は、日本人学校教員が補習教室に出向いて行うモデル授業、教育相談、教育に関する情報の提供、日本人学校で作成したり不要になったりした教材や資料の提供、学校でしか購入できない副教材の共同購入、児童生徒用図書の送付などである。

#### 教材の共同購入

副教材の共同購入は、日本人学校でしか購入できない（市販されていない）ものであったため、特に関係の保護者から喜ばれた。

#### 児童図書の寄贈

年一回ではあるが、日本人会の全面的な支援により、日本人会フリーマーケットの収益で購入した図書を遠隔地の三地域に送る活動。

#### 教育情報の提供

教育情報や資料教材の提供については、若干古くはあるが最近まで日本人学校で使っていた指導書や参考図書類、教員が作成したプリント類、文部科学省や海外子女教育財団からの教育情報などを、郵送の他、メールやファックスを使って随時行った。

#### 教育相談

日本人学校の校長や教員が補習教室等に出向いて行う教育相談は、遠隔地であることや、派遣教員の本務である日本人学校の教育活動との調整の上で行わなければならないために訪問回数は限られるが、補習教室と日本人学校双方の理解とコミュニケーションを深める上で有意義な機会であった。モデル授業と併せて、2年間で延べ7回実施した。以下は、2006年10月に行った4回目のロツワフ教育相談会の概要である。

#### 第4回プロツワフ教育相談

午前10時に開会、持参した資料「補習教育ワンポイントアドバイス」を基に補習教育の意義や留意点について再確認した後、指導



及び学習上の参考になると思われる「学習支援サイト」をいくつか紹介した。続いて、日本人学校の活動紹介や短期聴講モデルプランを提示。これらは本校のPRでもあるが、同時に海外子女教育のあり方を考えるための提案でもあった。

自由討議では、12名の保護者が、日本語での教育環境づくりの苦労や工夫について、司会を必要としないほど活発に意見を交わし、昼食時間に入っても、補習教室の子どもたちが作った作文や俳句などをもちに、指導上のいろんなアイデアについて話し合った。午後は、国語や算数の指導で工夫していることを日本人学校・補習教室相互に出し合い、今後の指導に生かすヒントを探った。その後、個人的な相談に移り、午後4時過ぎに閉会した。

個人相談は、主に帰国後の適応や進学に関するものであった。以下は事後の感想である。

日本人学校の子供達の明るくのびのびとした様子、みんなで協力する様子がよくわかりました。機会があれば是非短期聴講させたい。補習授業の具体的なアドバイスはとても貴重な情報だった。今日の話し合いで大きな力を得た感じです。日本人学校のコマーシャル楽しませていただきました。海外に住み日本語教育をいかにするかというテーマを持つ私にとって、数々のアドバイスは大変役に立つものでした。

信じ難い事件が次々と起こる日本の教育現場を見てきた私にとって日本人学校の子供達の素直な姿は心安まる思いです。

補習教室は手探り状態の活動ですが、今日の話し合いで一筋の光が見えてきたように感じた。基本的な考えが間違っていなかったとも確信しました。こちらに来てから日本の勉強が遅れることへの焦りから、必要以上に子供達に勉強を強いていたような気がします。校長先生のお話の中で、「楽しんで勉強する」「学習意欲を育てる」という事があり、考えさせられました。知識を詰め込む教育ではなく、子供が自信を持ち自ら学びたいと思うような働きかけを、私達はする必要があります。今回、改めて指導の方向性を見出せた気がします。我々の手探りの補習教室を改めて整理し今後につなげる貴重な話し合いになりました。貴校の様子がよくわかったこと(のびのびと学ぶ生徒たち、それを支える先生方など)や校長先生から直接お話を伺えたことは、海外の小都市に住む我等にとって心強く、大きな支えとなりました。これからも補習教室の運営にまた貴校のお役に立てることを互いに知恵を出し合っていきたいと思います。

#### モデル授業

ブロッツワフ補習教室に二度目に訪問したときに初めて実施した。日本人学校の子どものメッセージを補習教室の子どもたちに伝えたり、童話を使った国語指導を行ったりしたところ、参観していた複数の保護者から「日本語環境で話を聞いたり発表したりする子どもを見ていたら普段とは目の輝きが違う。やはり可能であれば日本人学校に入学させたい。」という声を聞くことができた。既にインター校になじもうと努力している段階では実現性の薄いことではあったが、大変うれしい反応であった。

モデル授業は、その後も教育相談に派遣教員が出向いた時に、補習教室の子どもたちに日本人学校の学習の一部を体験させる取り組みとして実施した。

#### (2) 学習交流

学習交流は、双方の子どもたちによる作品の交換、修学旅行での共同学習、日本人学校への体験入学、俳句コンテストなどである。

##### 子ども作品の交換

子どもたち同士の自己紹介や学校紹介、ご当地クイズは相互に郵送で交換して教室や廊下に掲示した。これらは、その後の短期聴講で日本人学校に体験入学した子どもたちとのスムーズな交流に役立った。こうした取り組みがもとで、その後も家族間で交流する例が見られた。

##### 短期聴講(体験入学)

ワルシャワ日本人学校では、現地校やインター校と日本人学校の長期休業のずれを利用して、現地校やインター校の児童生徒を短期聴講生として受け入れている。特に夏休みは約一ヶ月のずれがあるため、6月半ばから7月半ばまでの間の2～3週間を日本人学校で学ぶ児童生徒が多い。教育相談やメールを使ってPRした結果、2005年度からは遠隔地のブロッツワフからも数名の児童が短期聴講に来るようになった。ある子どもの母親は、「一日中思い切り日本語が使える環境で子どもが見違えるように生き生きしていた」と喜ばれた。2～3週間にわたる不慣れなワルシャワでの生活であったが、日本人会や保護者会のサポートによって快適な生活を過ごせたとのことである。

##### 修学旅行での交流と共同学習

2005年6月、日本人学校高学年と中学部はワルシャワ西方のポズナニ方面に修学旅行を行った。この地域の邦人子女数は10人程度であったが、現地の日本人会会員の協力を得て現地での交流が実現した。普段限られたメンバー内でのコミュニケーションが主である双方の児童生徒にとって、初対面同士で適度の緊張を伴った交流は新鮮な体験だったようである。

さらに、2006年5月の修学旅行では、邦人子女が40人近くに増えたブロッツワフ方面を訪れることになった。事前の資料収集は日本人学校と補習教室の児童生徒が共同作業で行い、修学旅行当日は補習教室の児童生徒が現地でのガイド役となって活動した。準備段階で補習教室の保護者には多大の負担をおかけしたが、後日感想を聞いたところ、平素日本語を使う機会が限られている補習教室の児童生徒にとって実践的な学習の場となったという評価をいただいた。遠隔地との交流・連携は物理的・時間的に困難な面もあるが、今回のように双方が知恵を出し合って交流が成功したときの喜びはひとしお大きい。協力いただいたブロッツワフ補習教室並びに日本人会の方々に心から感謝したい。

##### 俳句コンテスト

日本人学校では、手軽な国語表現の一つとして、俳句を募集し、月に一回程度コンテストを行っていた。応募

は全く自由で、図書室の片隅に置いた箱の中に思い思いの作品を書いて入れるだけである。優れた作品には内容にふさわしい写真や絵を添え、プレゼンテーションの形にして全校朝会で発表した。子どもたちは予想以上に乗り気になり、発表を楽しみにしていたようである。もともと余暇利用の遊び感覚で始めたものだったが、この活動を通して子どもたちは表現の面白さや言葉の微妙な味わいを楽しんでいたようである。

太陽の光とゆっくり遊ぶ春（本聴講生）

喜びの小鳥の歌を春が聞く（本聴講生）

上の短歌は、日本人学校高学年の本聴講生（現地校に通いながら週一日だけ日本人学校に通学する生徒）の作品である。日系二世の彼女は日本語にハンデがあるので、実際の学年より下のクラスで学習していた。しかし、日頃の学習活動からも、豊かな感性の持ち主であることがうかがえた。ポーランドの厳しい冬が終わり、明るい春が来た喜びを、擬人法をつかって見事に表現している。

補習教室の子どもたちにも作品の投稿を呼びかけたところ、たくさんの作品が寄せられた。次に紹介するのは第10回コンテストで優秀賞に選んだ作品である。ここに挙げた6人のうち5人が、これまでに短期聴講や学校見学などで日本人学校に来ており、日本人学校の子どもたちとは既に顔なじみになっていた。

こがらしがぼくのまわりをまわってる（小2男）

あそびたいいつなおるかなぼくのかぜ（小2男）

どんぐりがぼうしをとられないている（小2女）

パリパリとかれ葉が音をならしてる（小3女）

まっくらにしずまりかえるあきの夜（小4女）

草原でコオロギたちの演奏会（小4男）

### （3）日本人会・商工会による連携支援

日本人学校の取り組みと連動して、日本人会や商工会でも当初のアイデアが次々に具体化された。なかでも、次に挙げるものは、地方との一体化をめざす日本人会にとって大きな飛躍となったばかりでなく、補習教室との連携を推進する日本人学校に力強い追い風となった。

補習教室などへの図書寄贈の財政支援

地方都市における日本人会組織の強化

- ・地方の代表者とのネットワークづくり
- ・地方の会費割引などによる日本人会への加入促進。

地方都市からの日本人学校行事への参加促進

- ・日本人学校行事の前後に商工会会議などを開催
- ・運動会や日本人会ソフトボール大会の開催に合わせワルシャワでの会議やゴルフを実施

地方都市での教育相談会開催支援

- ・地方都市での商工会総会と教育相談会のリンク
- ・教育相談の案内、会場予約等の支援活動

### （4）活動経過概要

およそ2年間の取り組みの概要は次の通りである。

遠隔地教育交流関係活動経過	
2004年	
12月	プロツワフ地区の調査訪問を計画
2005年	
1月	プロツワフ地区の調査訪問、情報分析 遠隔地交流が日本人会の重要課題に決定
2月	プロツワフ補習教室との情報交換開始
4月	ポズナニ地区との修学旅行交流打診
5月	文部科学省海外子女教育研究指定を申請
6月	前期指導書を補習教室に送付 修学旅行でポズナニ地区の児童と交流
7月	文部科学省研究指定内定 プロツワフからの短期聴講
9月	後期指導書を補習教室に送付
10月	プロツワフ地区教育相談 モデル授業
11月	児童図書を日本人会予算で遠隔地に送付
12月	日本人会総会で教育交流の概要を説明
2006年	
1月	補習教室巡回指導・モデル授業・教育相談
2月	共同購入副教材の発注
4月	補習教室に副教材を送付
5月	プロツワフ方面修学旅行での交流
6月	プロツワフからの短期聴講
7月	補習教室と俳句作品の交換
9月	クラコフ地区教育相談
10月	プロツワフ地区教育相談
11月	プロツワフ巡回教育指導・モデル授業
2007年	
2月	文部科学省海外子女教育研究中間報告

### 5 活動を振り返って

本務である日本人学校勤務に加えて遠隔地との連携を進めることは、時間的にも距離的にも制約があり、思うように進んだとは言えない。むしろ、足りないところが目に付き、反省することの方が多し。しかし、大使館、日本人会、商工会、学校運営理事会、PTAなどの全面的なバックアップのおかげで、大変楽しく充実した活動ができた実感している。特に、日本人学校のような整った教育施設が全くない地方都市で、子どもたちのために奮闘している保護者や関係者の努力を目の当たりにし、頭の下がる思いがした。派遣された日本人学校しか知らずに帰国することを思えば、その何倍もの研修をさせていただいたような気分である。

#### （1）活動の成果

遠隔地との教育交流を通して、学校教育を進める上で

重要ないくつかのことを改めて確認することができた。

教育の原点に学ぶ

補習教室との連携は、派遣教員にとって新鮮で刺激的な経験となった。日本語教育環境を整える自助努力をされている関係者の姿を目の当たりにして、学校がある、先生がいるのがあたりまえなのではなく、何も無いところから教育環境を創り出す努力こそが教育の原点だと実感した。

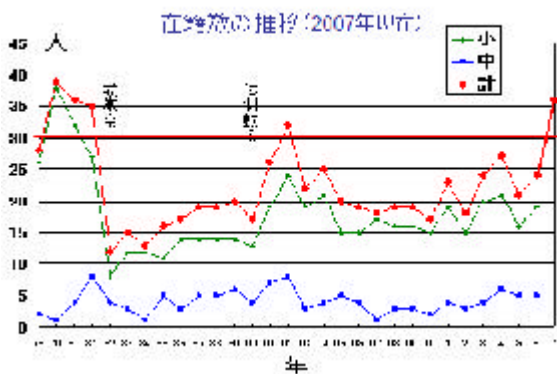
遠隔地との教育交流は、海外での日本語教育環境づくりのための先人の苦労や努力を改めて想起する、いわば「教育の原点に学ぶ」取り組みでもあった。

純粋で素直な学びの姿勢

日本人学校や補習教室の子どもたちは純粋な知的好奇心と素直で前向きな姿勢をもっている。学びの姿勢はこうでなくてはならないと思う。海外に住んでいると、日本の急速な変化に取り残されはしないかという不安を抱くことがあるが、日本人学校では国内とほとんど同じ内容を国内の学校以上に濃密に学習している。また、様々な異文化体験によって国際理解を深めたり実践的なコミュニケーション力を培ったりする貴重な機会がたくさんある。日本人学校の子どもたちは、現地でしか学べない貴重な学習をしてきたことに自信と誇りを持ってほしいと願っている。

学校と家庭・地域・関係団体との連携

2007年、ワルシャワ日本人学校の在籍数は、過去2番目となる36人に増えた。もちろんこの背景には、ポーランド全体での邦人数の増加があるのであって、コウノトリプランが功を奏したなどと単純には考えていない。



しかし、遠隔地方都市の教育環境整備と日本人学校への入学勧誘という相矛盾したかに見える目標に向かって、学校と大使館や日本人会などの関係諸機関・団体が一体となって取り組んだという実感はある。

ともかく、在籍数の確保は日本人学校の求心力とも関係づけられやすく重い課題であっただけに、たとえわずかにしても人数が増えたことは嬉しい限りである。在籍数確保というやや不純な動機だったかもしれないが、コウノトリプランによる補習教室等との連携は、海外女子

教育の原点に学ぶ有意義な活動であったと思っている。協力いただいた関係諸氏に厚くお礼申し上げたい。

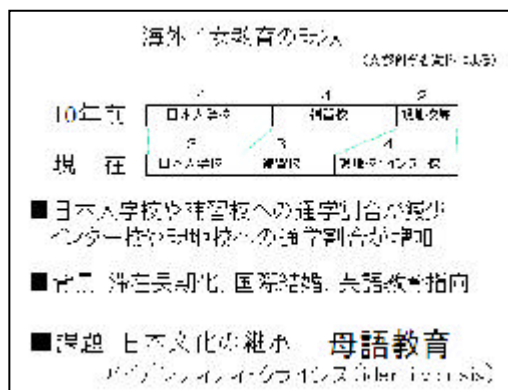
(2) 反省と課題

2008年、プリティッシュスクールは独自で日本人講師を雇って日本語の補習授業を始め、結局、保護者が運営していたプロツワフ補習教室はそこに取り込まれる形で解散した。以前、日本人学校からたびたび補習教室を訪れることを知ったインター校の校長が、日本人児童を日本人学校に引き抜かれるのではないかとびりびりしていたとも聞いていたので、自校の在籍数を確保するための経営戦略の一環ではないかとも思う。

しかし、インター校の校長は以前から「日本人の低学年クラスでは日本語の基礎をしっかりと学習しないと、英語を含むその後の学力向上が期待できない。」と言っていただけに、この度のインター校の決定には、外国人教育に対する国際学校としての真剣な姿勢も感じられる。

近年、海外在住の邦人子女の多くが、日本人学校へ入学せずに、インター校や英語圏の現地校を選択する傾向がある。その背景には、国際結婚などによる定住者の増加もあるが、それ以上に、インター校や英語圏の現地校に入れることによって子供に英語力をつけさせようとする、安易な英語教育指向があるとされている。

日本人学校や補習授業校(教室)の存在意義については、これまで帰国後の受験や国内学校への適応という面から語られることが多かった。しかし、日本人学校・補習校離れが今後も続けば、日本文化の継承に関する問題やアイデンティティの希薄化などの深刻な問題が発生すると言われている。皮肉なことではあるが、英語指向が強くなるにつれて、海外子女教育における母語教育即ち国語教育が大きな課題になっていくと考えられる。



参考文献

ワルシャワ日本人学校(2008)『学校要覧』  
 在ポーランド日本国大使館(2006)『ポーランド事情』  
 文部科学省国際教育課(2007-2008)『気球船』

(2009.9.1受稿, 2009.11.19受理)